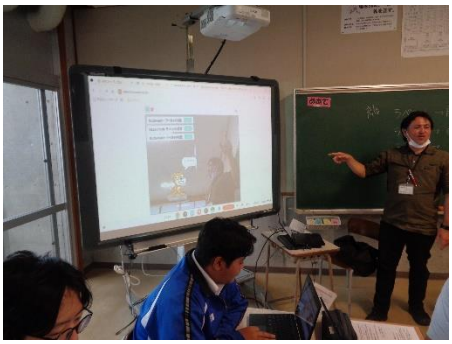
宝物はすぐそばに

校内研通信
第28号　　R7.11.28
発行者:校内研担当　仲村智

結局 AI 様も顔の見てくれで判断されるのですね



１１月２８日（金）１校時、３年７組にて池間彦律先生が技術の授業を公開しました。本時のねらいは、PC の機械学習を利用したプログラミングができるようになることです。導入で未来社会の動画を視聴し、ICT の活用がこれからの社会では必要不可欠であることを実感させ、本時のメインの活動となるスクラッチを使って顔認証のプログラムを作っていく流れを既習事項を確認しながら説明していきます。これが、プログラミングを全くやったことのない私にとってはちんぷんかんぷん・・・ホントに理解しているのか半信半疑でしたが、生徒はすらすらとプログラミングを構築。顔認証の応答の言葉やキャラクターを変えたりと、想像以上の工夫を加える始末。恐れ入ります、これが ICT 申し子達の姿なのですね😊。その生徒を、興味のおよぶ先まで能力を伸ばしていこうと教材開発している彦律先生、私自身にとっても大変勉強になった授業でした😆

RS みいつけた！

AIがもたらす変化に対応するために、なぜ「読解力」が必要か

AI を使いこなすには AI より高い能力（汎用的読解力）を持つことが大切

例えば、「山口とは友達だ。私は山口と岡山に行ったことがある」という日本語を自動翻訳サービスにかけて英訳すると　〝Yamaguchi is a friend. I have been to Yamaguchi and Okayama.〟という英文になりました。「山口とは友達だ」と言っているのですから「山口と一緒に岡山に行った」、つまり　〝I have been to Okayama with Yamaguchi.〟　でなければおかしいはずです。ところが自動翻訳サービスでは「山口」を地名だと判断してしまっています。AI は、まだこの程度の文脈も読み取れないことがあるわけです。このような例から、「AI ができないこと」をあげつらうのではなく、「AI は完全ではないけれど、そこそこの仕事はできる」という事実を知ることが大切です。AI による仕事が正しいのか、間違えているのかの判断もできない人は、「そこそこの仕事もできない」ということになり、AI の進化とともにふるい落とされていってしまうことになるでしょう。AI を使いこなすには、AI の誤りを判断できる力、AI よりも高い能力を持つことが必要なのです。